2009年度・中国語学科メディア教材の上海撮影の報告

孫　安石　（中国語学科・教員）

神奈川大学・外国語学部中国語学科では2003年度から学校の教学新規事業予算の支援を受け、メディア教材作成プロジェクトを進めている。中国語学科が実施しているメディア教材作成プロジェクトは学生自らが企画・撮影・編集の全過程に参加し、最終的にはDVDの教材を制作するもので、参加者の多くからきわめて高い刺激を受けた旨、感想が寄せられている。

しかし、メディア教材の作成は、日本国内での事前準備と上海での現地撮影、日本に帰国した後の編集作業という長期間にわたる共同作業が必要で、とくに初めて参加する3年生への負担はきわめて大きい。第6回目を迎えた今年の中国語学科メディア教材の現地撮影と編集は、指導教員の在外研究の都合で1年の空白があり、その上、4年生の経験者が1名だけ、という厳しい状況の下で上海の現地撮影に臨むことになった。

今年度のテーマは、上海の経済発展をバスと船、そして、列車と地下鉄という交通産業から捉えなおすことであった。上海の現地撮影で経験した苦労とハプニングについては、各班の報告に委ねるが、参加者のみなが一回り大きな中国経験をしたことは間違いなかろう。

バス班は、大都会の上海の市内交通の中心を担うバスのクラクションの騒音とわれ先とスピードを競う運転手さんの曲芸にも似た運転に悲鳴を上げながらも、上海から衛星都市の嘉定市を結ぶローカル線を2時間にわたって耐えきった。実はみな爆睡中だったので危ない運転にはあまり気付かなかったらしい。

船班は十六浦の船着き場で、浦東（東方テレビ塔や森ビールが鎮座する新上海を象徴する地区）と浦西（南京路とバンド、そして、夜景で代表される旧上海を象徴する地区）をつなぐ上海市民のもう一つの重要な交通手段が船であることを初めて目の当たりにした。さらに、1500万の人口を抱える上海の農産物を供給する各種の農場や養殖場が位置する崇明島にも足を運び、上海の黄浦江沿岸に林立する産業地区も見学できた。

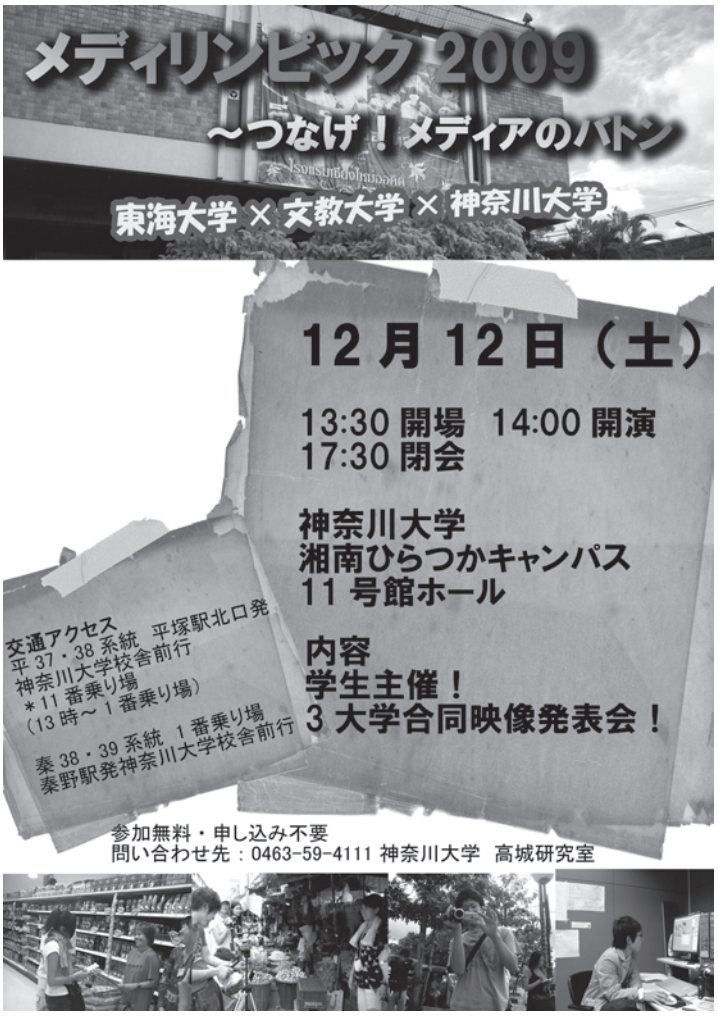
列車班は最初、上海駅と上海南駅、そして地下鉄という比較的撮影しやすい環境に恵まれたか、と思えたが、蓋を開けてみるとそういうわけにはいかなかった。上海駅では駅の警備員の視線を逃れ、なんとか列車のチケット販売所の撮影に成功したと思ったが、どういうわけかビデオの音声がはいっていなかった、という苦い経験に見舞われた。私たちが撮影に臨んだ9月10日はちょうど「新中国建国60周年」の記念行

事の準備期間と重なり、上海南駅や地下鉄など人口流動が大きい駅を撮影するためには警察と警備員にくりかえし説明を求められ、その対応にみな四苦八苦であった。

幸いだったのは今までのメディア教材の製作にほぼすべて参加したベテランの卒業生S君が上海に合流してくれたこと、そして、中国側パートナの東華大学の陳祖恩先生と4名の優秀なナビゲータが手際よく訪問先を手配してくれたことであった。

いまこのように終わってみれば、ビデオと三脚をもって走りまわった短い日程が夢のように思える。例年であれば、4年生の先輩たちの経験を頼りに順調にビデオの編集も順調に進んでいるはずであるが、今年はそうでもない様子でいささか心配であるが、ここは学生たちを信じることにしている。

今年の活動で特筆すべきことは、2009年12月12日に神奈川大学・平塚キャンパスにて東海大学（文学部・広報メディア学科）、文教大学（情報学部）、神奈川大学経営学部・理学部、外国語学部（中国学科）の4チームが合同で映像発表会を開くことができたことである。「メディリンピック2009—つなげ！メディアのバトン」というキャッチフレーズを掲げた合同発表会を通して学生は他大学との交流ができ、お互いの作品に批評を加えるという新たな段階に進むことができた。

大学の教育において学生の自発的な学習の重要性が求められることはいうまでもないが、中国語学科が毎年、実施しているメディア教材の作成は学生の自発性を「極限」まで引き出す潜在力を潜めた企画であると自負している。

中国語学科メディア教材プロジェクトが今まで制作した成果はhttp://human.kanagawa-u.ac.jp/media_station/chinese/index.htmlに公開している。本プロジェクトを通して、一人でも多くの学生が中国とアジアの変化に触れるきっかけをつかむことを願っている。